



巻頭

戦場（いくさ）に出づる

千たび 千人の敵に かたんより

ひとり 自己（おのれ）にかつもの

彼こそ最上の 戦士（つわもの）なり （法句経 103）

◇新：法句経講義 6 3◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

「人に勝つより、まず自分に勝て」とか「まず、おのれに勝て」とか、昭和の戦時中の教えのように受け取られるかもしれませんが。でもそれは、いつの時代にも通用する、生きていくうえで大切な教えです。

朝起きる時、布団を出るつらさ。布団を出るには、まず自分に勝たなければ、出られません。学校や会社に行くとき、いつも、楽しい気持ちで行けるわけではありません。自分の気持ちをふるい立たせ、何とか出かける日だってあります。

嫌なこと、辛いことを避けたい、逃げたいというのは、誰だってあることです。でも、そうしたことをみんな避けていたら、いい経験もできず、忘れられない思い出も作れないかも知れないのです。

勇気をもって、自分の逃げる心、弱い心にかつこと。それこそが真の勇者だ。今時のアニメのセリフのようですが、けして間違ったことではありません。

「したいようにすればいい」とか「やりたくないことはしなくていい」とか、自分の気持ちを第一に考えようとする現代の風潮のなか、それだったら「自分」をいつまでも越えられない、自分を大きくしていけない、という考え方を伝えるアニメも、捨てたものではないなあと思います。

叙景 表紙を語る

コロナに苦しんでいるのは人ばかり。木も花も、鳥も虫も、コロナなど関係なしに、春に向かって一直線に進んでいます。

ふと見あげると、まっ白な光が、雑木林のうえに輝いていました。そうだまた春がくる。緑がめばえ、温かな風が吹きわたる春。そんな春が来たら、コロナに負けない、強い力が取り戻せる。そう信じ、前を向きたいものです。

八王子の園の、うしろに広がる雑木林での一枚。もう春がきます。

< 主管所感 >

則天去私

友松 浩志

段々、もの忘れがひどくなってきた。メガネをかけながらメガネを探すなんて、まるで漫画みたいなことをするようになった。書類がなくなるのは日常茶飯事、探し物で何時間も無駄にする。人生の残り時間が少なくなっているのに、とイテイラする。

コロナ自粛の毎日、外に出かけることがメッキリ少なくなった。テレビはつまらないので、自然と本に手がのびる。最近、どうしても読んでおきたい本を読もうとするようになった。最近読んだのは、夏目漱石の「硝子戸の中」。漱石晩年の小さな随筆集だ。何故読んでおきたい本かという、文筆家志望だった父と母が、何かとこの本の名を口にしていたからだ。「ガラスドノナカ」は、頭にこびりついた書名だった。

漱石が晩年（といっても 48 歳の時）、体調を悪くして家に引きこもりながら、身の細々としたことを、思い出を混ぜながらグダグダと書き、新聞連載したものだ。これがまさに、コロナで家にひきこもり、グダグダしている身にぴったりした。人は、外界と無縁に生きられるわけではない。こもっていても、人が訪れてきたり、昔の思い出が頭のなかを過ぎていく。大正初め頃の、早稲田や高田馬場あたりの風景が、静かに語られている。

漱石は晩年、「則天去私」（そくてんきよし）という言葉で理想としたという。これは漱石が作った言葉だそうで「私心を捨て、天の道理に従う」という意味である。昔の思い出を語るとき、自分のこれまでの人生が、まるで自分の意思というより、天の計らいのように感じられる、というのは、そろそろ私にも分かりかけてきたところだ。

それよりも何よりも、身のまわりのものが頭の中から去っていつてしまうのが怖くて、宣伝にのって、「記憶力」に効果があるという飲物を買ってしまいました。もの忘れが、やがて「自分忘れ」にならないよう、目の前の暮らしを大切にしながら、コロナの災禍が一日もはやく終わることを祈ってやまない。

◆西墓地別院志納金御礼◆

— 檀信徒の皆様のご協力に感謝して —



△ 正面入口 車が1台とめられます。

前号でもお伝えしたように、昨年7月下旬、西墓地隣地に新しく別院が完成しました。木造2階建て／1階・2階とも約57㎡で、1階は休憩所とトイレ、2階は礼拝室になっています。檀信徒の皆様には、たくさんのご協力を頂き（志納金総額:19,603,000円）厚く御礼申し上げます。これまで休む所もなかった西墓地利用の皆様には、念願の施設として1階でしばらくお話しされたり、2階の仏堂で法要をされたりと、活発な利用が始まっています。

檀信徒の皆様には、今号に志納金の寄付者名簿を同封させて頂きました。今回、東幕地の皆様にも、たくさんご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

◆ 訃 報 ◆

■ 石上 善鷹 先生（大正大学名誉教授）

昨年11月29日遷化されました。（91歳）北海道のご出身

で、大正大学在学中から神田寺の青年会に入れ、卒業後は仏教学者として広く活躍されました。先々代の友松圓諦師の学門業績を継承され、平成27年には神田寺で、圓諦師の43回忌にあたって記念講話もして下さいました。

■ 関口 久志 上人（行田・醫王寺住職）

昨年8月29日遷化されました。（72歳）大正大学卒業後、神田寺総務・幼稚園主事として8年間ご奉職下さいました。法務事務に精通され、先代の友松諦道師の右腕として活躍されました。退職後も、彼岸会には毎回ご助力下さいました。

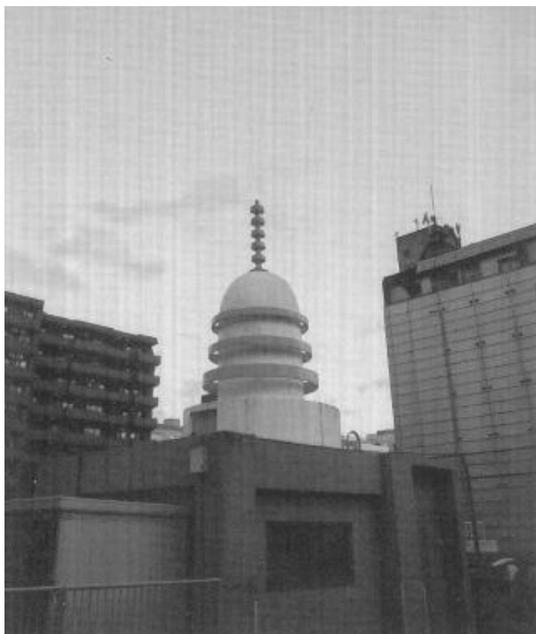
※「仏教豆知識」は、今号お休みさせて頂きました。

◆ コロナと戦う ◆

昨年から、コロナ感染予防のため様々な工夫をして保育を行って来ました。手洗い・うがいの徹底はもとより、間隔をとって活動したり、だまってバラバラに昼食をとったり、行事にも大幅な見直しが必要でした。子どもたちもがんばってコロナに耐えています。一日も早い終息宣言を待っています。



△マスクに大分慣れました。



巻頭

親しさより

うれいは生じ

親しさより

不安（おそれ）は生ぜん

親しさを

離れし人に

うれいなし

いずこにか

また おそれあらん (法句経 213)

コロナ禍のなか、外出が制限され、思うように人に会えなくなりました。人は人とまじわることで「人間」になると言われます。「人と会えない辛さ」、一方で人とのまじわりが「苦」になることもあります。「人」との関係、コロナ後の自分を、少しづつ考える時かも知れません。

叙景 表紙を語る

神田寺の建物の屋上にある法塔。混み合った街路からはなかなか見えません。法塔はお寺の象徴となるもので、本来はお釈迦様の遺骨を収めたものです。

神田寺の建物はもう築50年以上になって、まわりを高いビルに囲まれ、この法塔が見える場所のごく限られています。でも、その限られた場所からこの法塔を見つけて、頭を下げてくださいる方もおられます。ありがたいことです。

< 主管所感 >

立ち返る場所

友松 浩志

神田寺は、戦後二つの寺が合併してできた寺なので、二か所にお墓がある。寺と離れたところにある墓地なので、そこに管理の人を置いて、1年365日お墓参りをお待ちしているが、どんなも来られない日もたくさんある。人件費も大変なので、お参りを週3日とか4日に限定したいところとだが、なかなかそうもいかない。お墓参りは、休日にする方も多いが、「命日」にする方もある。「命日」、特に父母兄弟・親族などの命日は、おぼえているもので、その日その数になるとその姿を思い出す。お墓参りに行こうかーとなる。だから、1年365日お墓参りの候補日となる。

私の母の命日は、8月14日である。その年の7月下旬、急な発熱で入院した母の病状は目まぐるしく変化した。病名も治療法もハッキリしないまま、アツという間に危篤状態になってしまった。8月12日の夜、親族が集まり始めていた頃、羽田発大阪行きの日航123便ジャンボジェット機が群馬県の御巣鷹山に墜落した。

その夏、日本中を騒がせた国内最大の航空機事故の顛末は、母の死、葬送の準備などで私の記憶にはない。事故の顛末を知ったのは、しばらくしてからのことだ。事故機には、父の友人も乗っていた。とはいえ、それ以来8月12日が近づくと、墜落現場の御巣鷹山への慰霊登山のニュースが流れ、事故が話題となり、私は母を思い出すことになった。

12日が命日となった多くの犠牲者の方々とともに、今年、母も37回忌を迎える。36年の歳月を思い、自分自身のこれからの考えるために、慰霊登山をするように、私も「お墓参り」をするだろう。

お墓というのは、「亡くなった人を入れる」というだけの場所ではない。生きている人が、そこに立って自分を見つめる場所、そこでなければ「立ち返ること」のできない場所である。あの山、あの尾根のように。

(2021 年) 12 月 1 日発行



巻頭

「すべての法(もの)は
わがものにはあらず」
と かくのごとく
智慧もて知らば
彼は
そのくるしみを厭うべし
これ清浄に入るの道なり

(法句経 279)

ガンジス河に沈もうとする夕陽。インドの聖地、バナレス(ヴァーラーナシー)で撮影した一枚です。バナレスは、ガンジス河に面する交通の要衝で、古代から多くの文明の中心になった場所です。沐浴をしたり、火葬も行なわれる場所として有名です。コロナで多くの人々が亡くなったり苦しんでいる世界に、平穏で幸せな日々が訪れることを、祈らずにいられません。

◇新・法句経講義 64 ◇

<※ 「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

何ごとも自分の思い通りにならないとガマンならない。そんな風潮が見られる今日この頃。自己中、自分のことしか頭になくて、自分の都合のみを押し通す、それが当然という人にあたると、手のほどこしようがありません。

相手にだって都合があること、相手にも言い分がある、思いがあることになぜ気づけないのか、理解出来ない時があります。そんな時には、そういう風に育った人、育てられた人と諦めざるを得ないこともあります。

SNS の書き込みにも、辛辣なものが多いようです。先の選挙の応援演説にも随分ひどいものがあったようです。広く世界に目を転じると、最近の中国の対外政策も随分不穏に見えます。そんなものを見ていると、つい「あんた、そんなに偉いんかい」と言いたくなります。遠慮とか配慮のない、自分の思いだけの世界。一見、ストレートで分かりやすく見えますが、一皮むけば軽薄で単純なものばかりです。

この世の中は「わがものにはあらず」と悟った人は、ひとまず落胆するけれどその現実を受け入れたとき、本当の自分、本当の世界に近づいていきます。有限である自分に気づけば、相手(他者)への配慮も生まれます。それは、より深いより大きな自分になっていくということです。清浄に入るの道というのは、仏の世界に近づくということです。

< 圓諦忌の予告 >

友松圓諦師 50 回忌

(神田寺一世轉法輪春誉圓諦大和尚)

来年(令和 4 年)は、神田寺初代主管・友松圓諦師没後 50 回忌にあたります。命日の **11 月 16 日(水)午後**に、式典および講話会を開催する予定です。時間および講師については未定です。詳細が決まりしだいご案内申し上げます。

(50 回忌は、大きな節目の年です。多くの皆様のご参集をお願い申し上げます。)

< 主管所感 >

昔話・自慢話

友松浩志

人は年をとると、昔話と説教、そして自慢話ばかりするようになるという。確かに自分を省みて、そんな風になってきたようにも思う。もっとも、坊さんなので「説教」は仕事として許してもらうにしても、昔のことはよく話すようになった。

最近、記憶が曖昧になってきて、3年位前のことがなかなか思い出せない。コロナ禍でしばらく行かなかった場所など、近くまで行ってもまったく見当がつかず、ウロウロするばかりというところもあった。その分30年前、40年前の出来事が鮮明だったりする。昔住んでいたアパートなど探しに行って、当時の思い出にひたったことも一度や二度ではない。昔のことが、ひどく懐かしく思える。だから、昔話をするのかもしれない。

私が子どもの頃は、まだ戦争に行った人が何人もいて、よく戦争の話が聞かされたものである。でも今思うと、あまり壮絶な戦場の話は聞かなかったように思う。子ども相手にそうした話を避けたのか、悲惨な記憶はあまり話したくなかったのか。でも、そうした話をしてもらったおかげで、子ども心に「戦前の暮らし」や、「戦争の大変さ」が伝わったことも確かである。昔話をすることも、悪いことばかりではない。

自慢話は、余りしない方だと思う。それは、人に自慢する(できる)ようなことがほとんどなかったからで、したくても大した話があまりない。もともと「自己肯定感」が低く膨大に書いてきた日記は、ほとんどが反省文状態。読み返すのが苦痛で、ある時大部分を捨ててしまった。人生の最終章が近づいてきて、これからは、少しは自慢話を書き残しておきたいものである。

人生は、成功と失敗の繰り返し。いいこともあれば、悪いことだってある。自分なりに経験してきたあれこれを、嫌がられずにどう次の世代に伝えておくべきか、そんなこともそろそろ考えておくべき時なのかも知れない。

る場所として作られたのが「寺」の起源です。それが後に拡大して、礼拝の場所としての「塔」などと合体して、今日の「寺」の形態が形成されたと考えられます。

令和4年 年回表

	(没年)
1 周 忌	令和 3 年
3 回 忌	令和 2 年
7 回 忌	平成 2 8 年
13 回 忌	平成 2 2 年
17 回 忌	平成 1 8 年
23 回 忌	平成 1 2 年
27 回 忌	平成 8 年
33 回 忌	平成 2 年
37 回 忌	昭和 6 1 年
43 回 忌	昭和 5 5 年
47 回 忌	昭和 5 1 年
50 回 忌	昭和 4 8 年
70 回 忌	昭和 2 8 年
100 回 忌	大正 1 2 年

○土日に法要を希望される方が多いため、予約は電話でお早めをお願い致します。参加人数、塔婆をあげる方のお名前などは、1週間前までにお知らせ下さい。当日は位牌をご持参下さい。お寺に車2~3台駐車可能。タクシーも呼べます。

○西墓地別院での法要をご希望の方は、必ずその旨のお申し出をお願いします。東墓地の檀家の方でも、西墓地別院で法要を行なうことが出来ます。

なお、他の法要との関係で、実施できない場合もありますのでご了承下さい。

仏教豆知識 83

寺

寺(てら)は寺院(じいん)とも言われますが、その言葉の由来は複雑です。「てら」という日本語は、朝鮮語の thol (礼拝)か、パーリ語の therā(長老)に由来すると言われ、はっきりしません。「じ」は、中国語で役所・官舎を指し、後に仏教寺院を指す言葉となったものです。

インドで仏教が生まれた頃、僧侶が雨期などに一時的にとどま

◆ 夏まつりを楽しむ ◆

—コロナの夏に—

コロナの影響で、今年も幼稚園の行事は、大幅な変更や中止となっています。年長児が楽しみにしていた「お泊まり保育」も、2年続けて中止となり、今年もそれに代わるものとして「夏まつり会」を行ないました。

夏休み前の夕刻、幼稚園に集まった年長児は、盆踊りや夜店などを楽しみ、最後に先生たちの用意した打ち上げ花火や吹き上げ花火を見たり、一人ずつ手持ちの花火を持って、夏の思い出を作りました。保護者の皆さんも離れた所から応援して下さいました。



△ 手持ち花火も楽しみました。

◆ パラリンピック観戦 ◆

コロナの今夏、一年延期されたオリンピックとパラリンピックが、無観客で開催されました。無観客といっても、学校観戦プログラムは実施され、当園からも少数ながら年長児の希望者が参加し観戦しました。神田寺幼稚園は代々木競技場で車椅子ラグビー、真理学園幼稚園は武蔵野スポーツプラザで車椅子バスケットの試合を応援しました。ともに、ほとんど他の観戦者がなく、広い会場にボランティアの方々が少ないという状況にびっくりしました。とはいえ、テロ対策のチェックがあったり、コロナ対策の消毒があったりと、完璧な準備と運営に感心させられました。

ほとんどの方がテレビ観戦だった大会に、短い時間ですが実際に参加し、応援できたことは貴重な体験でした。直前のPCR検査や熱中症対策の備品の配布など、周到な準備をして下さった東京都の皆さんに、厚く御礼申し上げます。



△ パラリンピック会場で